

大壁が間引かれた家

他者を受け入れる家

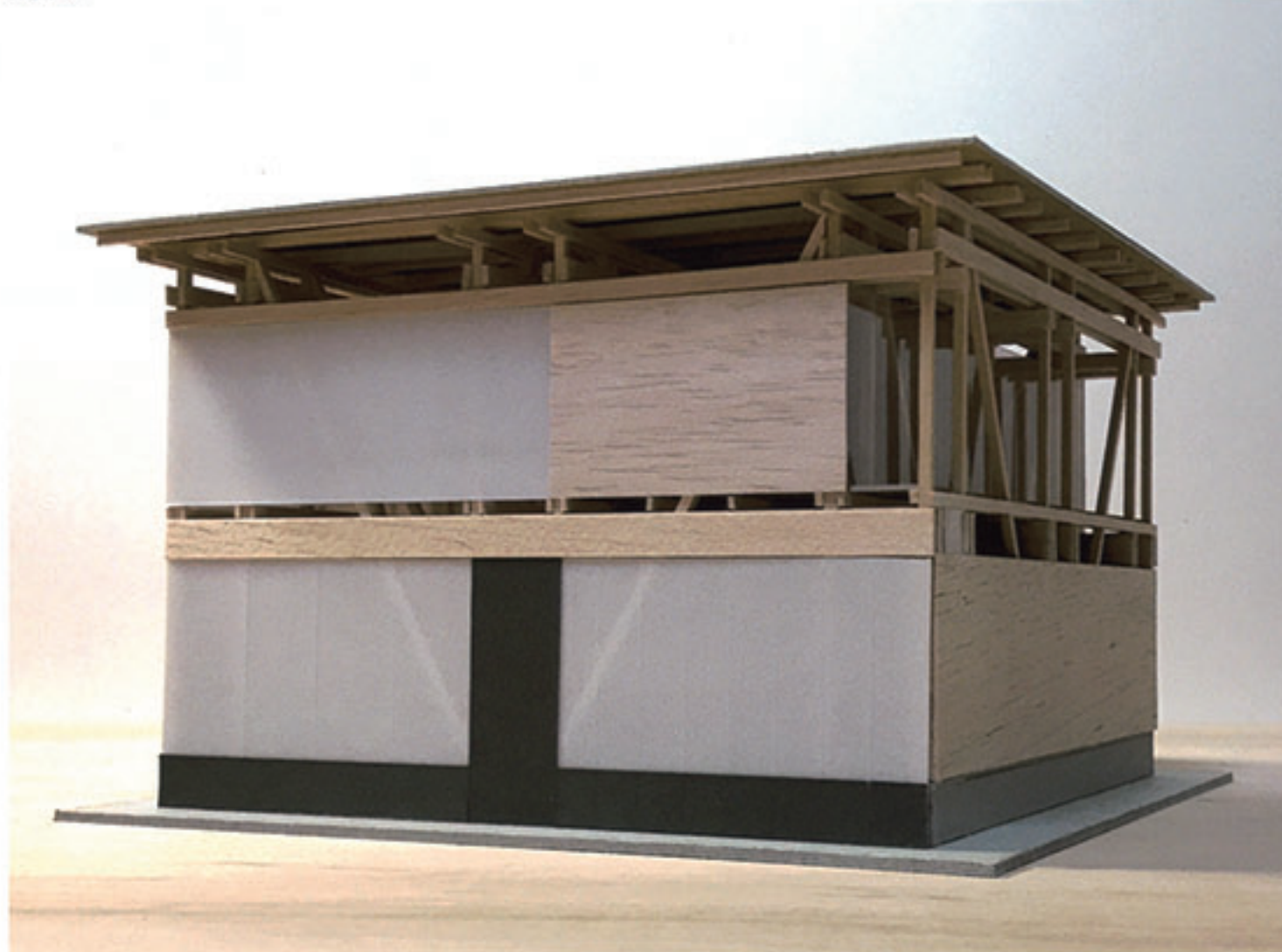
ここでいう他者は単なる来客ではなく、そのときの建主ではない次の全く新しい住まい手やプログラムと捉える。これを受け入れて生き続けられる家が太っ腹な家と言えるのではないかと。そこで、一見すると邪魔に見える構造体を使いこなしていくような家を考える。現代の住宅は邪魔なものが少ないが故に、能動的に使いこなせない。ここで、現代建売住宅の凡例ともいえる「大壁構造」の構造用合板を部分的に間引くことで、身体的な手がかりをたくさん用意し、利用者の能動性を喚起する。

外観 - 建具開放



間引かれた大壁の隙間に建具をはめている

外観

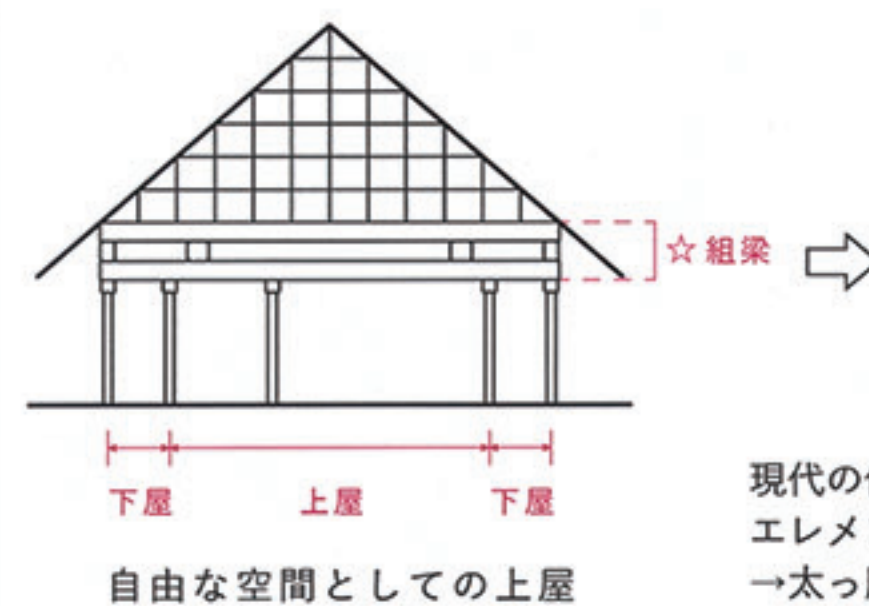


内部空間の使い方が直載に現れている

農家の空間性質

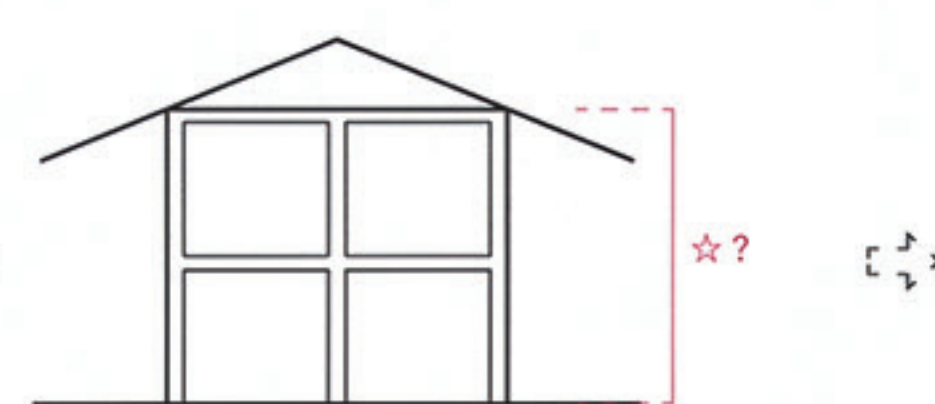
太っ腹な家ときいてまず農家が連想された。農家の構造は組梁の上下で分かれている。この組梁によって柱の本数が省略されているために、上部構造に柱の位置が左右されず、広い土間空間や生活空間を獲得している。そしてその両脇に斜材を架け渡して規模を拡張しており、中央部分を上屋、両脇を下屋と呼ぶ。実際に農家の空間を体験してみると、下屋を物置や動線等のサブ空間とすることで上屋をメイン空間として広々使っていた。空間としての太っ腹さはメインとサブを明確にすることで得られる。

農家



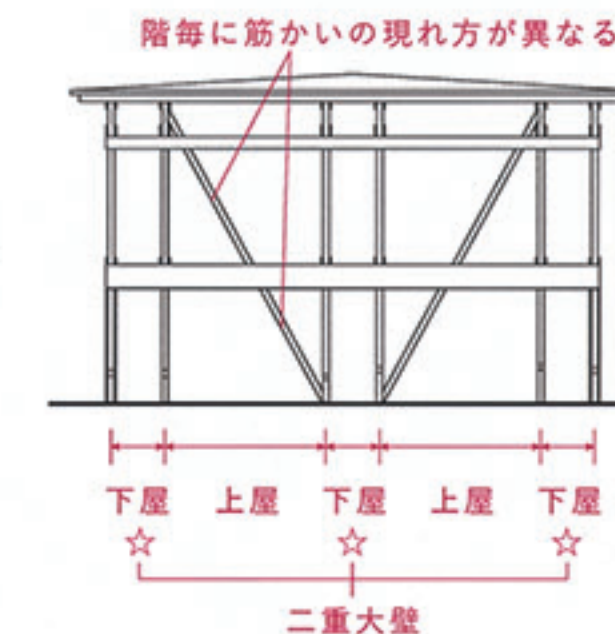
自由な空間としての上屋

現代建売住宅



現代の住宅は「大壁」によってフレキシブルさを獲得したが、エレメントが減ったことで生活の拠り所が失われた。→太っ腹さ不在の現代

大壁が間引かれた家



二重大壁

凡例を少し変える

現代の建売住宅の凡例を援用しつつ、そこし変える。大壁を部分的に間引いたり、筋かいを全体構造として使う事で、積層する現代住宅に対応した構造形式になる。

内観 - 1階居間より吹抜を見上げる



1階の回遊性と2階の独立性が同時に見える

内観 - 1階食堂からキッチン方向を見る



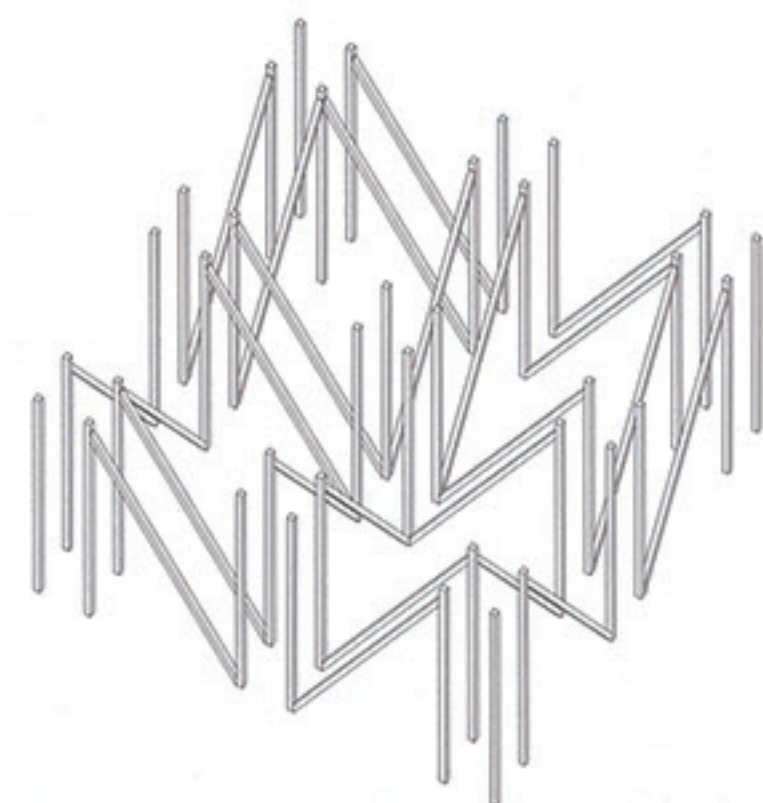
軸組を予め多様に扱う事で利用者の手がかりを示している

間引いた大壁と現れる筋かい

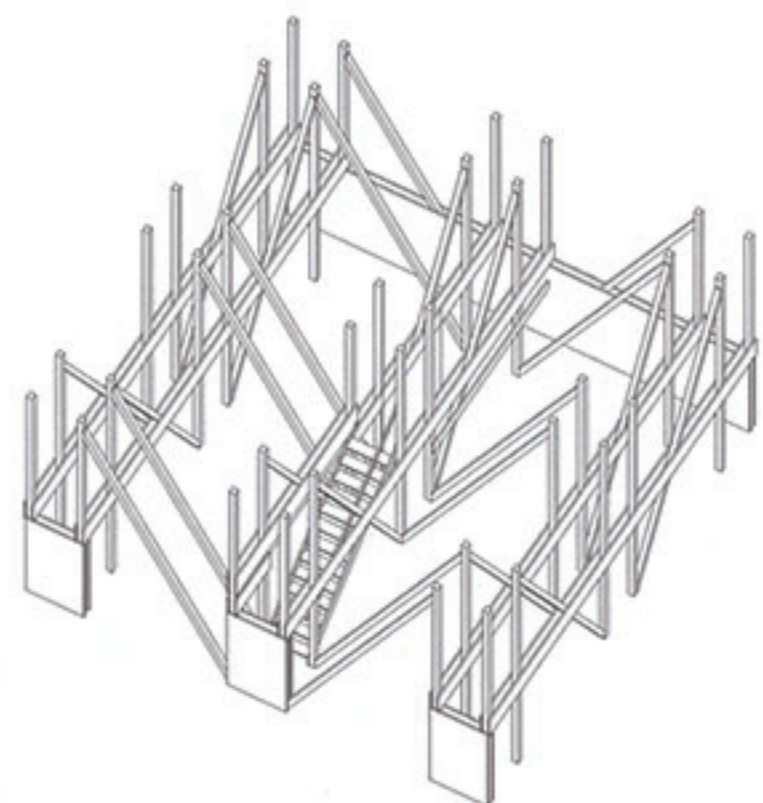
現代の木造住宅の凡例である大壁は、旧来の木造建築にある柱・梁・桁・長押を内包している。農家ではこれらの架構を生活の一部として取り込んでいた。たとえば、いりり上部の組梁に金具を吊り下げたり、さらにその上の小屋組に板を敷いて物を置いたりしていた。しかし、現代の大壁では身体的な手がかりが少ないため、次の新しい住まい手やプログラムを許容しづらい。この大壁を間引く事で、内包されているフレームに還元すると同時に、現代木造住宅の構造的に重要な部材である筋かいが現れる。この筋かいを積極的に活用するために上下階を貫き、階毎に異なる現れ方をさせた。



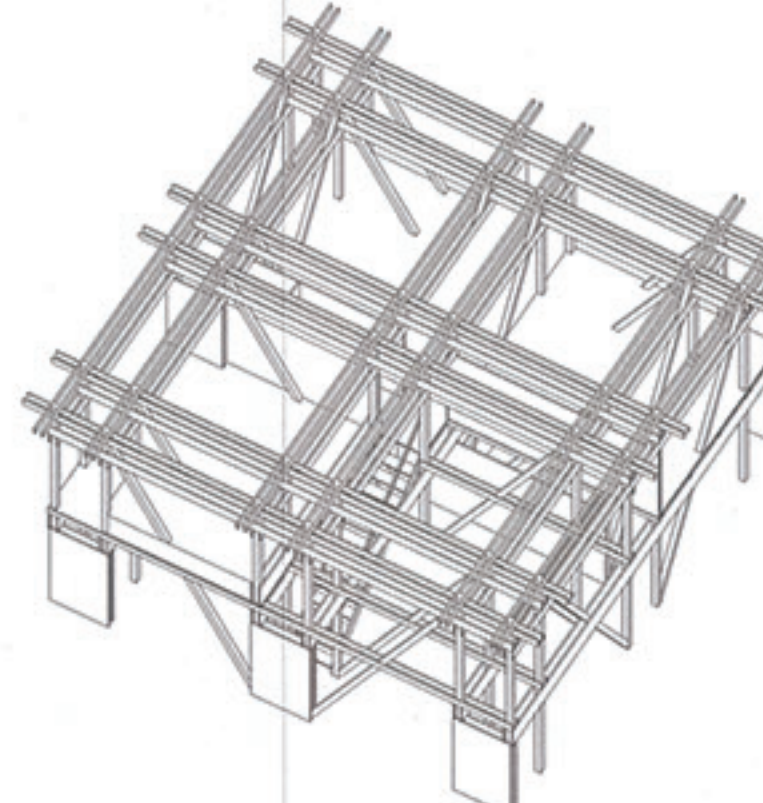
柱



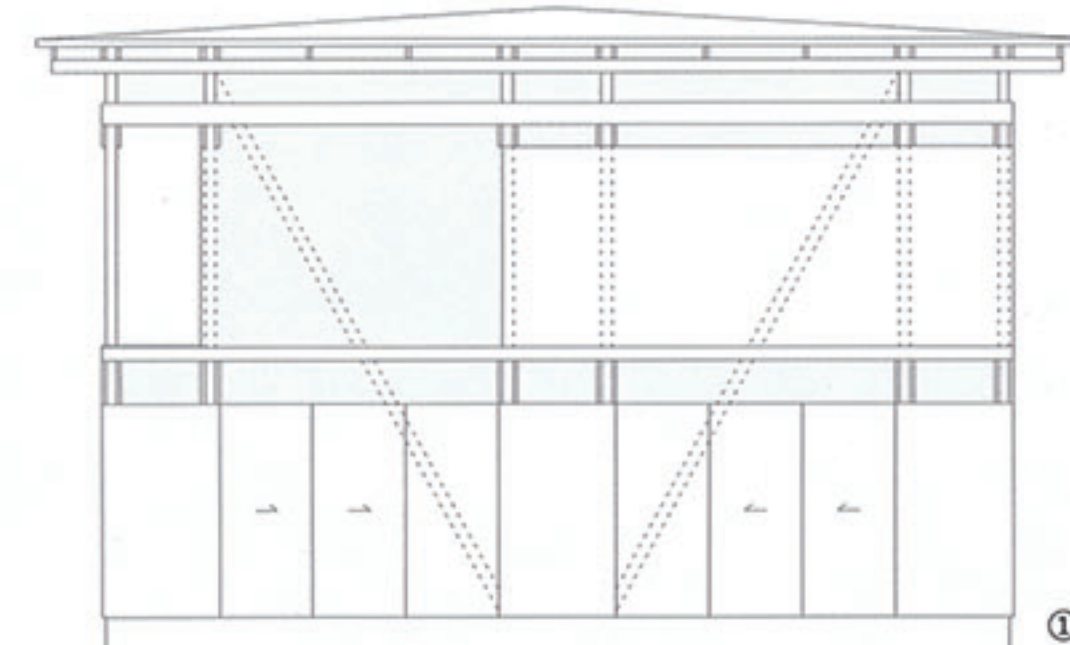
柱 + 筋かい



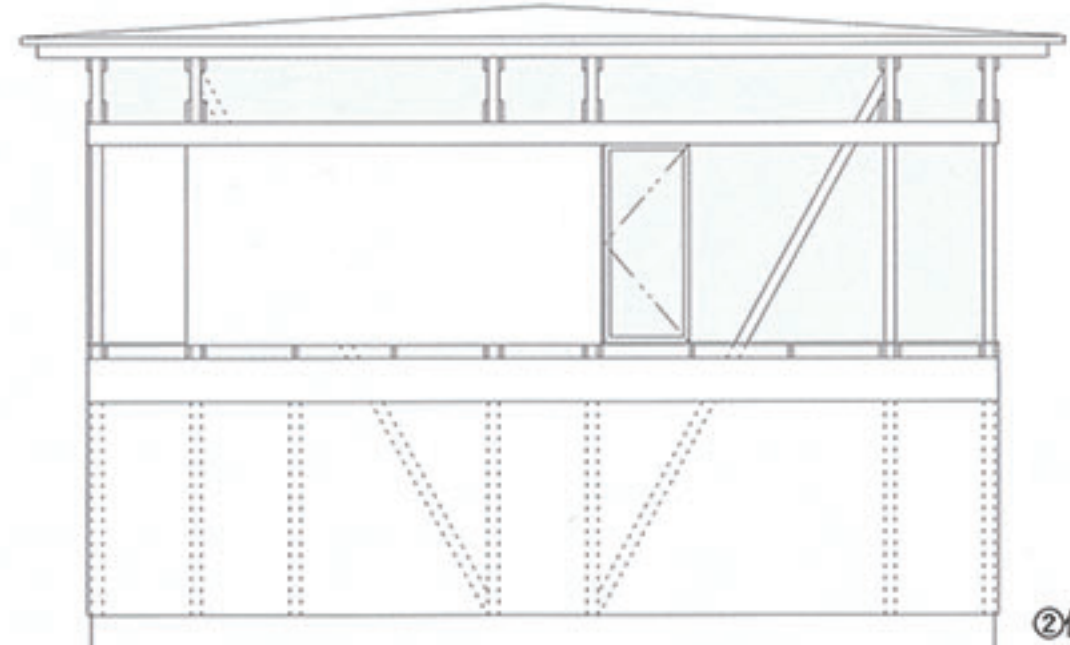
柱 + 筋かい + 大壁 (1階)



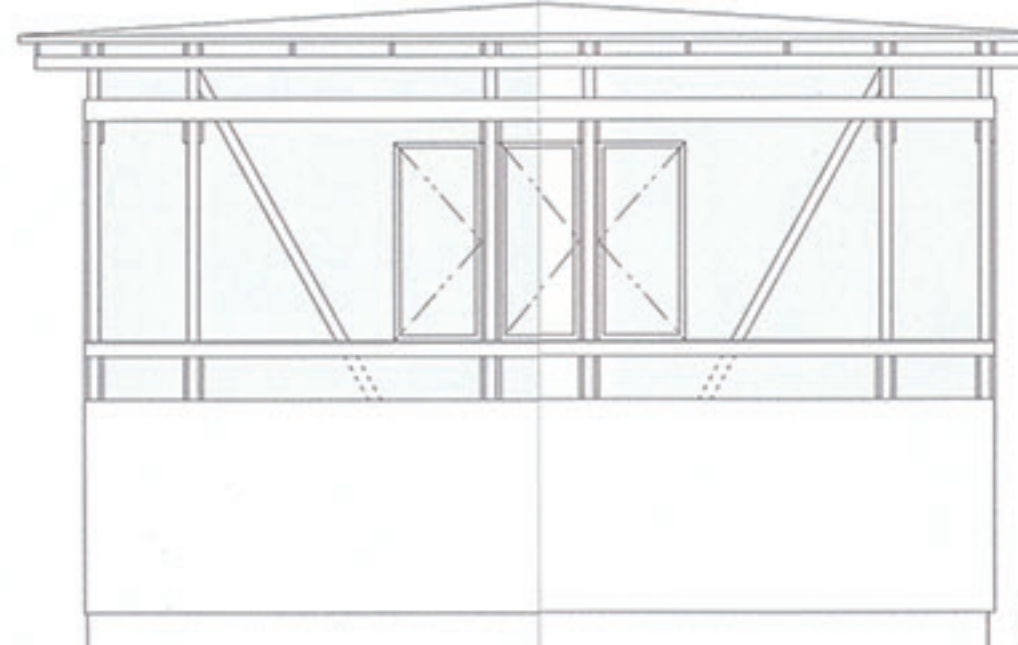
柱 + 筋かい + 大壁 (2階)



①側立面図



②側立面図

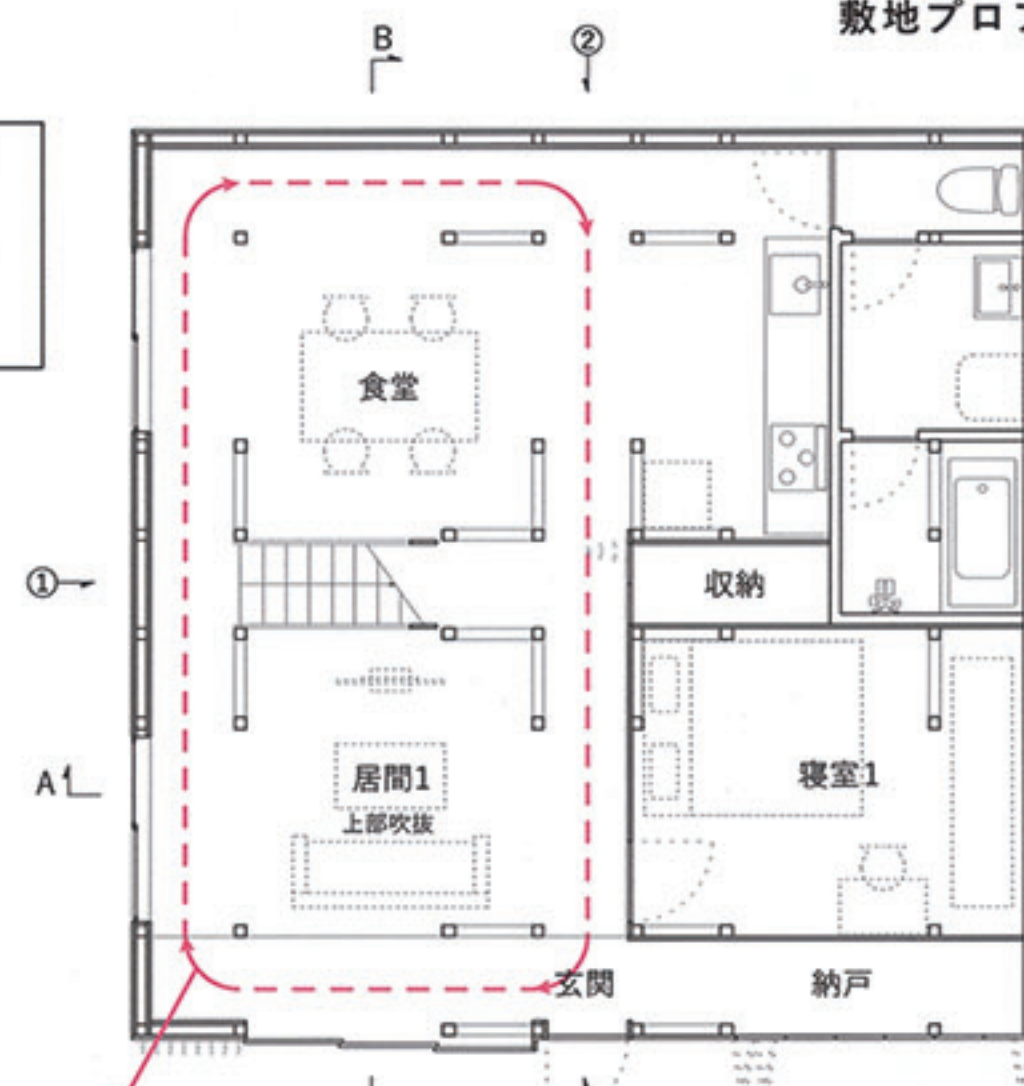


③側立面図

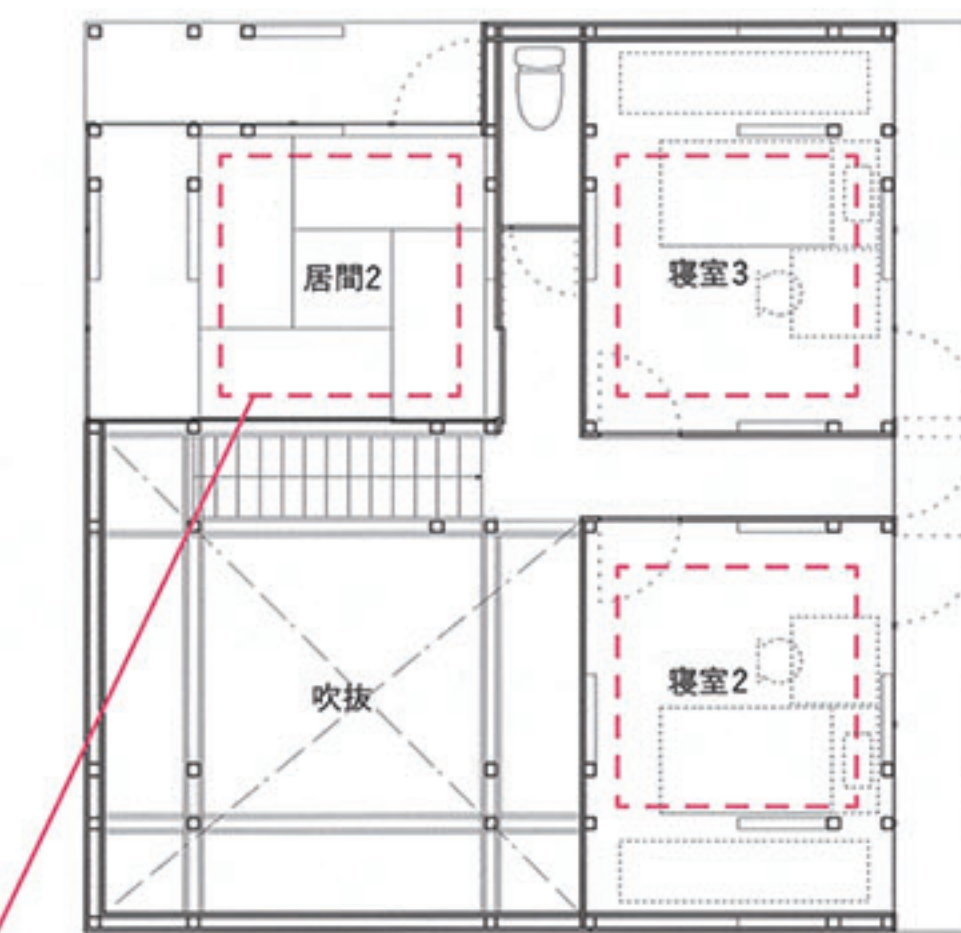
フォーマットとしての架構

大壁を間引いた架構は、多様な読み替えを許容する上で重要な、利用者の主体性を喚起する事を狙っている。現代において失われてしまった手がかりのあるエレメントとしての木造フレームを、大壁を間引き、部分的に露わにすることで読み替え可能な太っ腹な家を目指した。

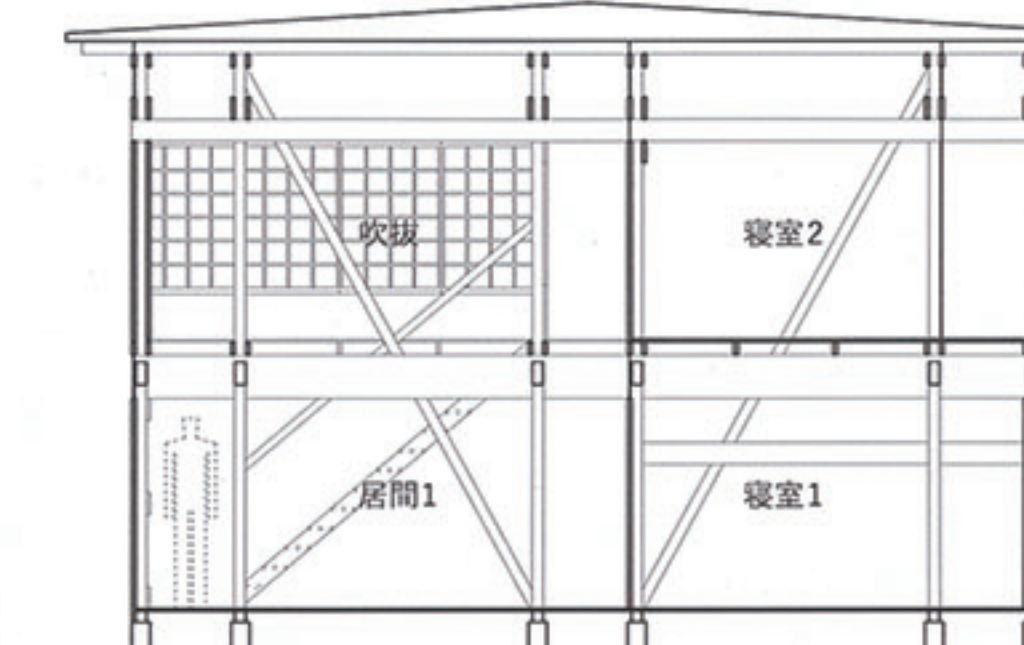
敷地プロフィール: 現代都市の典型のような郊外庭付き一戸建て住宅が立ち並ぶような敷地を想定。敷地形状は設定していない。



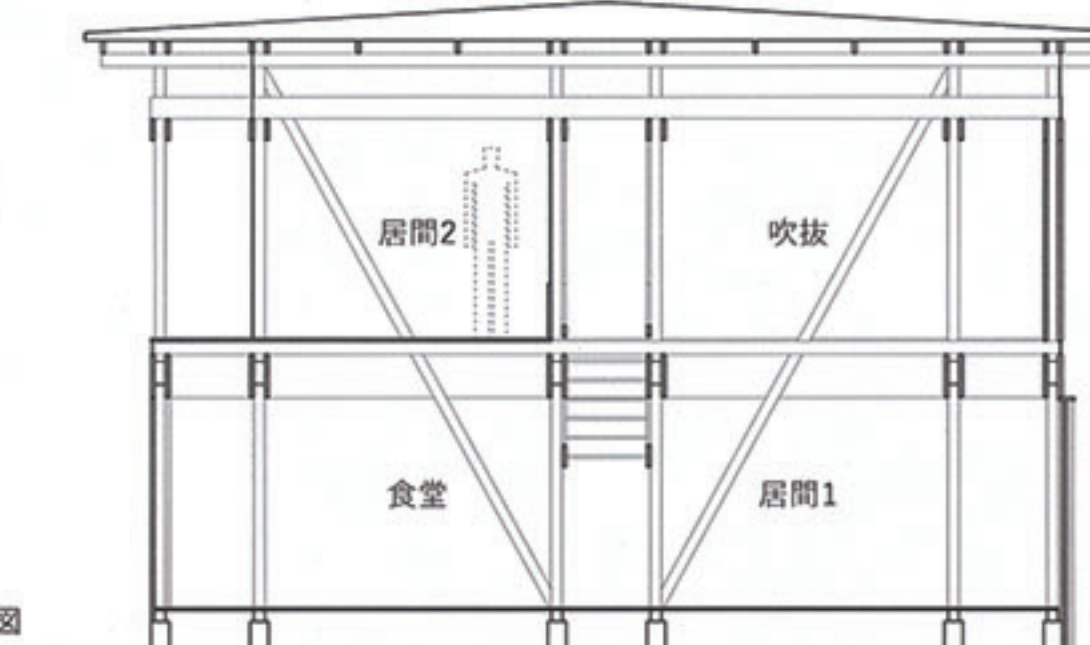
農家の構法上生まれた便利な関係性 (上屋と下屋の関係) を、現代に応用するために下屋空間を十字に通すと回遊性生まれる。



建売住宅の凡例の一つである筋かいを上下階に貫くことで、1階では回遊性、2階では独立性を生み出している。多様な空間を用意する事で、異なるプログラムにも対応できる。



A-A'断面図



B-B'断面図

